

挑んだ国政離合集散

証言 橋下政治 8年

4

衆議院の解散風の中で、橋下徹大阪市長は2012年、国政へと動き出す。

「国を変えるための戦とは選挙。大戦に備えて準備していこう」(12年3月24日、「維新政治塾」の開講式で)

衆院選に向け、候補者の養成を始めた橋下氏。大阪市内であった開講式には、午前と午後の2部制で計約2千人が参加した。

「熱がこもっていた。ほんまに戦いに行くんや、という感じで話していた」

市内に住む社会保険労務士の有沢千尋さん(36)はその場にいた塾生の一人。年

金の相談を受けるうちに制度不信を募らせ、講義を受けていく中で「これほどの熱意と実力を兼ね備えた人はほかにいない」と、橋下氏に心酔していった。

親族の反対で立候補は断念したが、今年7月に長男を出産し、現役世代を重視する橋下改革への思いは強まるばかりだ。「これだけ人が集まんねんぞ」と塾を開いたから、(大阪都構想関連の)法律も通った。すごいエネルギーだった」

橋下氏は12年9月、国政政党「日本維新の会」の結党を宣言。その場に、名古屋市長で地域政党「減税日本」代表の河村たかし氏

(67)もいた。「挑戦者という構造は私も橋下さんも同じだった」。合流を模索したが、看板政策の減税が障害になり、見送りに。「自民党に対抗する政党を作りたかった。一緒にやっていたら、政権交代もできていたと思う」と悔やむ。

「日本の根本を変えるために、いす取りゲームをやっている政党、あそこを全部変えていく。石原総大将が我々のリーダーになったんですから」(11月17日、日本維新と「太陽の党」の合流合意後の会合で)

合流後の日本維新の代表に就任した石原慎太郎氏(83)は、代表代行の橋下氏とのコンビを「双頭の鷹」と呼んだ。「やっぱり才能があるよ。演説はうまいし、気っぶはいい」。政界

再編での路線対立で離別したが、今も「井の中のかわずじやだめだぞ。大阪から首出してさ、世間を眺めた方がいいよ」と助言する間柄だ。「彼が政治家を辞めちゃったら、自分の育てた政治家を見殺しにすることになる。そりゃ、いかんよ」と引退を惜しむ。

「全部同じ考え方だったら、それこそ北朝鮮になっちゃうじゃないですか」(11月17日、日本維新と太陽の合流会見で)

「2030年代までに原発ゼロ」を掲げていた橋下氏は、原発推進派の石原氏との合流で主張を「封印」



日本維新の会と太陽の党の合流が決まり、笑顔みせる石原氏(左)と橋下氏=2012年11月、大阪市

する。橋下氏のブレインだった環境エネルギー政策研究所所長の飯田哲也氏(56)は「軸として持つべき哲学がない。石原さんと組むに至っては、支離滅裂だった」と手厳しい。

自身は滋賀県知事(当時)の嘉田由紀子氏らと「日本未来の党」を結党し、衆院選に挑んだ。未来が「10年で原発ゼロ」の工程表を発表すると、橋下氏は「嘉田さんの今回のプランはポロポロ」と批判した。「彼の焦りを感じた。自分の党で学ぼうとした政策が、他党の政策になったら批判する。そこが政治家・橋下徹の本質なんだろ

う」と振り返る。「安倍首相はどんな色んなことをしている。応援するところは応援する」(13年3月30日、日本維新の初の大大会で)

12年12月の衆院選で「第三極ブーム」に乗り、日本維新は第3党に躍り出た。一方で民主党は壊滅状態に。大阪府内では小選挙区で全敗し、比例復活できたのは辻元清美氏(56)だけだった。自ら「乱気流」と呼んだ戦いで生き残った辻元氏は、橋下氏の政界での立ち位置に疑問を呈す。

「大きな与党であればあるほど、野党がきちんとチェックしていかないといけない。野党の中に政権とながって斟酌するような人たちがいることは、日本の政治に良いとは思わない」(太田成美、岡本智)



た愛好家も「幸せな気持ちで正月を迎えられます」。



辻元清美氏

「愛の家も「幸せな気持ちで正月を迎えられます」。

(太田成美、岡本智)